

松浦の新しい風へ！

—地域おこし協力隊を紹介します！—

10月1日、新たに「地域おこし協力隊員」を1人採用し、松浦市の「地域おこし協力隊員」は2人となりました。新しく松浦に移住した小高秀二さんと、昨年松浦に移住した中村友香さんの活動について紹介します。



小高 秀二さん

(東京都出身)

平成28年10月1日から松浦市役所政策企画課に所属。

今、自分にできることから…

◆地域おこし協力隊に応募したきっかけ

生まれも育ちも生粋の江戸っ子ですが、子どものころから自然の中で過ごすことが大好きで、東京での就職後も休みには海へ山へと遊びまわっていました。

やがて旅行では満足できなくなり一念発起。東京での仕事を辞め、北海道富良野市に移住。川下りを中心とした観光ガイドの仕事に就きましたが、大きな肩の怪我で長期リハビリのため東京へ戻ること。順調にリハビリが進むにつれ、やはり自然の豊かな地で暮らすことを諦めきれず、今度は「海のまち松浦」で新しいチャレンジをしようと思い、協力隊に応募しました。

◆松浦市に住んでみて感じたこと

「青い海のまち」というイメージでしたが、緑の山々や涼やかな清流など、自然のすべてがあることに驚きました。松浦の人たちも心優しく穏やかで、子どもたちは明るくのびのび。東京にはない時間がここには流れていることを肌で感じています。

◆これからやってみたいこと、目標

近年、特に大規模消費圏では食に限らず、「価格が高くて質の良いもの」を求める本物志向が高まっていると感じています。

松浦市は魚介類や農産物などに恵まれ、非常においしい本物の食材が多く生産されているにもかかわらず、残念ながら東京などの大規模消費圏からの認知度は高くありません。

その大規模消費圏をメインターゲットに、松浦市の認知度を上げ、松浦産をブランド化できたらと考えています。

また、美しい島々が点在する伊万里湾などの豊かな観光資源もありますので、松浦産のブランド化は観光産業への好循環の促進にもつながると考えています。

まずは松浦を「知っていただく」こと。そこから「興味がある」「行ってみたい」そして時間はかかると思いますが、いつかは「住みたい」につながる日が来ることを信じて、今、自分にできる小さなことからコツコツと頑張っていきたいと思っています。



しあわせって何だろう…

◆松浦に移住して学んだこと

「つながりの大切さ」を体感でき、本当の意味で学べたのは、松浦に移住したから。人とのつながりを大切に作る皆さんの暮らし方は、都会にはない魅力に溢れています。それによって、私自身も、毎日あたたかな気持ちで仕事に取り組むことができ、より一層、まちの魅力を発信したいと思っています。



◆福岡時代の心のモヤモヤ

東日本大震災のあと石巻市へボランティアに行き、「しあわせって何だろう?」「何のために働くんだろう?」と考えるようになりました。それが、松浦市へ移住するきっかけの一つとなりました。松浦の皆さんのお話を聞きながら、魅力発信のお仕事ができることは、とても有り難い仕事です。感謝しています。

◆これからの夢、松浦で実現したいこと

松浦市には、しあわせに働き、暮らせる環境があります。まちをつくってこられた先輩方、新しい魅力を創ろうとがんばっていらっしゃる方の思いを、皆さんと一緒に、全国へ発信したいです。そして、自分たちの手で、松浦市のしあわせな未来へつなぎたいです。



コミュニケーションデザイナー

中村 友香さん

(福岡県出身)

平成27年10月から松浦市役所政策企画課に所属。



Yukata Contest — 浴衣コンテスト —



クリスティー・マツカワ
Christie Matsukawa
アメリカ出身

皆さん、すてきな秋を過ごしていますか？皆さんが台風の影響を受けることもなく、収穫の秋を楽しんでいることを願っています。秋が深まっていくなかで、夏の出来事を振り返ってみました。例年だと、蒸し暑い夏を避けて、アメリカに帰っていましたが、今年は初めて長崎県に残って夏を過ごしました。

8月23日には、江迎町で開催された千灯籠の浴衣コンテストにも出場しました。この数週間前に友達が推薦して出場することになったのですが、正直最初は、興味は全くありませんでした。しかし、優勝賞品がハワイへのペアチケットと知って、ちょっと関心が高まりました。何をすべきか分からずに、友達のお母さんが浴衣を着せてくれて、気合を入れて行きました。祭りの会場に到着すると、誰も知っている人がいなくて、とても不安に感じました。イン

こんにちは！
外国語指導
助手です。



タビューで何を聞かれるのか、全く分かりませんでした。しばらくすると、コンテストの参加者とも仲良くなり、不安もなくなりました。ステージを歩く時は、できる限りの笑顔を作りながら、心の中では「つまづかないように、つまづかないように」と思っていました。インタビューの順番が来ると、不安な気持ちに打ち勝って、できる限り優雅に、日本語のインタビューに答えました。結果、私が日本について話したことが、審査員が気に入ってくれたためか、特別賞を受賞しました。



この経験はとても貴重なものとなりました。長崎で過ごしたとても思い出深い夏となったので、アメリカに帰国しなくてよかったと思いました。



図書館の おすすめ

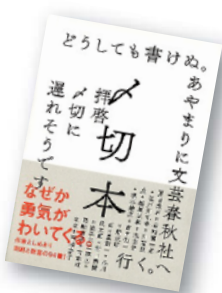
BOOK 本

市立図書館
☎ 0956-72-4677



松浦市ホームページで
「松浦市立図書館」を検索

土日、祝日も開館しています。(年末年始、臨時休館を除く)



『め切本』

左右社編集部／編 左右社

「今夜、やる。今夜こそやる…」時代は変われど繰り返されるめ切前の苦悩。90人の書き手によるめ切にまつわるエッセイ、日記、手紙、対談などを収録。夏目漱石、松本清張、村上春樹、西加奈子などなど……。かの文豪も！と読めば明日への希望が湧いてきます。



『10歳からの季節のお料理教室 季節のイベントレシピ』

大瀬由生子／著 日東書院本社

食で日本の暦を感じてみませんか？お彼岸の三色おはぎ、節分の恵方巻き……。行事を象徴する飾りつけと、写真入りでわかりやすく紹介された料理の手順。日本の文化、行事食がおいしく楽しめます。

◆◆図書館館長のお気に入り！◆◆

このコーナーでは館長がお気に入りの本や、図書館のちょっとしたいい話を紹介します。



【館長からひとこと】

10月1日付で館長に就任いたしました森頭登と申します。福岡県立図書館での実務を経て当館に参りました。「誰もが利用しやすい図書館」を目標に、図書館づくりを進めていく所存です。皆さまのお力をお貸しください。どうぞよろしくお願いいたします。

【お気に入りの本】『厨にありて 教師の妻の手記』近藤えい子／著 東陽閣 1941年

『厨にありて』は、佐世保出身の教育者・近藤益雄（1907～64）の妻の手による生活記録です。「教師の妻として」「育児記録抄」「父の仕事と子供達」の三部構成となっており、その中で上志佐村（昭和29年に志佐町と合併）が登場します。

益雄氏は、昭和3年5月から同6年8月までの間、上志佐尋常高等小学校の教員でしたが、純朴な村の人々とのふれあいや、当時の生活スタイル、方言、そして彼らを取り巻く自然が生き生きと描写されています。戦後知的障がい者教育に尽力することになる氏が、二十代の初めを過ごした地が上志佐村でした。

※『厨にありて』は図書館の所蔵資料ではありませんが、インターネットで読むことができます。当館の「PCコーナー」をご利用ください。